

〔エピソードⅠ〕果てしなき“石”との闘い

矢吹 拓

国立病院機構 栃木医療センター

分類学の父であるカール・リンネは『自然の体系（Systema Naturae）』（1735年）の中で、「自然界は鉱物界・植物界・動物界の3界に区分される」と体系化した。リンネはさらに「鉱物は成長する。植物は成長し生きる。動物は成長し、生き、感覚を持つ」と述べている。18世紀に登場した博物学者であるジャン＝バティスト・ラマルクは、著書『動物哲学』の中で「動植物と鉱物の間には超えられない断絶がある」と強調し、分類体系として両者には大きな差異があるとした。

本特集テーマは「石」と「人体」である。リンネやラマルクからすれば、全く別の分類体系である鉱物界と動物界が、超えられない断絶を超え、人体の中で出合っているのは大変感慨深い。

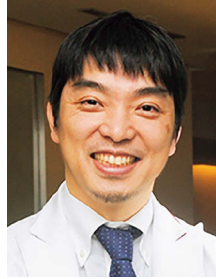
「石」と「人体」で思い出すのは、手塚治虫先生の医療漫画『ブラック・ジャック』に掲載されている「ときには真珠のように」である。ネタバレで恐縮だが、内容を共有させていただく。

ある日ブラック・ジャックの元に1本のメスが届けられる。メスは硬い鞘のような石に包まれている。

送り主は「J.H.」。ブラック・ジャックが幼少期に瀕死の重傷を負った際に、手術で命を救ってくれた医師「本間丈太郎（J.H.）」からだった。

ブラック・ジャックが本間医師を訪ねると、本間医師は病床に臥していて、ブラック・ジャックに重大な打ち明け話をする。

なんと、あのメスは以前ブラック・ジャックを手術した時に、本間が体内に置き忘れてきたもの



だというのだ（→p.915）。メスを体内に忘れたことに気付いた本間は、いつしかメスが体内に突き刺さり大事故に繋がるのではないかと気に病みながらも、結局打ち明けることができなかったというのである。

本間は7年後にもう一度ブラック・ジャックを手術することになった。再手術の際にメスを探すと、なんと、メスはカルシウムの石のような鞘に包まれていた。真珠貝が体の中に入った砂の欠片を真珠質で包んでいくように、体内のメスをカルシウムで包み込んだというのである。意思を持つことのない石が、長期間にわたって危険から体を守ったという大変興味深いエピソードだ。

本間は最期に、次のようにブラック・ジャックに語りかける。「人間が生き物の生き死にを自由にしようなんておこがましいとは思わなかね…」

「石と人体」「鉱物と動物」。分類体系は異なるが、この両者の邂逅は、現代医療においてなお、重要トピックである。石の持つ永遠性と人体の持つ有限性は、ある意味では対照的な関係であり、その対決は必然とも言えるのかもしれない。

本特集では、代表的な結石性疾患から比較的稀な石灰化病態まで、各領域のエキスパートの皆様素晴らしい原稿を賜った。臨床現場における「石」について、できる限り網羅できる特集を目指した。本特集が多くの皆様の手に届き、「石との闘い」に少しでも役立つことを期待している。

P.S. 本特集は“エピソードⅠ”である。次回“エピソードⅡ”に乞うご期待！

